

被爆者証言「運命の八月六日」

米吉 喜代子

私は米吉 喜代子（こめよし・きよこ）と言います。今年 84 歳になります。

私が 10 代にとっても辛い経験をしました。次の世代の方々に核兵器廃絶と世界平和実現を願ひまして、私の被爆証言ができますことを嬉しく思っております。

私は 1932 年 7 月 18 日に中区天満町に生まれました。天満町は市の中心街で、原爆ドームにも近く、ドームの周りや本川で泳いで遊んでいました。

原爆を思うとき、小学校から女学校への受験の経緯を切り離して考えられない思いを持っております。私は天満小学校卒業後、13 歳の時、4 月にめでたく第二県立女学校に合格できました。

アジア太平洋戦時中なので、日曜日も夏休みもなく、八月は学校での勉強もなく、雑魚場町で連日家屋疎開の後片付けでした。八月五日に作業が終わり、六日急遽、東練兵場へ芋畑の草取りに行くことになりました。

私たち一年生は全員 100 名、二年生は東西組の級長がジャンケンをして、勝った東組が 50 名、合計 150 名が東練兵場に行くこととなりました。

七日はまた、全員、雑魚場町での作業ということで別れました。

当日の六日、父親が早起きして作ってくれた弁当を持って、元気な者は乗り物を利用しての通学は出来ないのですが、ひさしぶりに電車に乗って、東練兵場に到着し、決められた畑に入り、作業を始めました。作業開始して間もなく、「B29 が来ているよ！」と周囲の友達が騒ぎ出し、立ち上がって見上げるとその時強烈な閃光とともに一瞬、熱湯を浴びせられたような熱線を後半身に感じ、芋畑の畝（うね）の中に耳と目をふさぎ、伏せました。

どのくらい経ったか、周りのざわめきで我に返り、目を開けると暗闇です。思わず、顔をつねってみました。「生きている！」「逃げなければ！」持ち物を置いた場所に向けて暗がりの中を走りました。周囲が段々と明るくなり、見渡せば、無傷のものは何一つなく、木々は折れ飛び、電柱は倒れ、電線は垂れ下がり、家々は無残にも倒壊し、瓦や多くのものが吹き飛ばされ、歩い

て来た道も通れるものではありません。持ち物を捜しましたが、爆風に吹き飛ばされて見つかりませんでした。

集まって来た友達も一人として元の姿の者がなく、服もボロボロに焼きちぎれ

全身の皮膚も垂れ下がり、目も口もふくれあがって、次第に誰かわからなくなっていました。仲良しの友達がうずくまっているのがわかり、駆け寄って、「手を引いてあげるから、肩を貸してあげるから、一緒に帰ろう」と声をかけましたが「目が見えなくなったし、足も歩けなくなったので。捜しに来た父に会ったら、ここに居ると知らせてちょうだい」と言いました。誰だか判別出来ないくらい、全身が火傷をしていました。

その時、担任の先生の声が耳に入りました。「ついて来い、ついて来い！」と大きな声で叫ばれ、大勢の友達が追いかけてきました。はぐれてはいけないと必死に、見失わないようについて行きました。にぎ津神社の前庭の木々も折れ、たれて、燃えており、火の粉を払いながら、牛田の先生の家につきました。

先生の家はくずれてはいましたが、家の前で腰を下ろし、前の小川へ足をつけてホットしました。全部で20人位いたのでしょうか。その時には、「水を飲んだら死ぬぞ、水を飲むな！」と、大きな声で叫んで歩く人々があり、体中は燃えるように熱く、「水が飲みたい、水の中に体を沈めたい！」と願いながら我慢しました。

周りにいた友達が「背中が燃えているよ」と教えてくれ、上着をぬがせてくれた。背中を中心部は焼け落ち、周りの布がくすぶり、煙が出てきました。その時初めて後頭部から背中、両腕が大きな水膨れになって、火傷をしていることに気づきました。痛みよりも「水が飲みたい！水を頭からかぶってみたい」、という思いを必死にがまんしていました。

先生の家のおすぐ近所まで火が迫ってきたので、皆を連れて、神社のある山の上に避難させ、「迎えに来るまで絶対にここを動いてはいけない！」と言われて家に帰られました。山中も多くの被爆者で、右往左往する人、大けがや、大やけどで倒れている人、死んでいる人、泣き叫んでいる人、まさに地獄図です。昼間と思われるのに、青空も太陽もなくて夕ぐれのような中に座っておりました。

何時間たったか、やっと、先生がみえ、市中の火の手もだいぶ下火になったようだからと安田女学校の門前まで連れてこられ、それぞれ、同じ方向に帰る者を集められ、「市中に入らないで帰るように」と言われました。私は己斐方面に帰る2年生2人と帰ることになりました。

工兵橋を渡り、太田川にかかる長い、長い汽車の鉄橋にかかりました。目をつむれば、踏み外し、立って歩くのは恐ろしいし、泣きながら這って渡りました。横川駅前から十日市まで熱風で焼けきった電車道を宙を飛ぶように歩きました。あまりの熱さにがまんできませんでした。焼けただれた電車に乗り込もうとすると、入り口に足をかけるところもなく、人が折り重なっており、窓も入ろうとする人、出ようとする人が重なり、生きているのか死んでいるか、動く人もありません。

どうにもならないとあきらめ、また、歩き初めましたが、また、焼けた電車が見えたので、今度こそは乗り込もうと急ぎました。熱風から身を守る所もなく、裸足の足の裏が溶けてなくなるのではと心配でした。

途中、大竹から救助に来たといわれた、3、4人の消防団のおじさんに「元気でおれば、家族にも会えるよ。見れば、火傷をしているなら、己斐小学校が救護所になっているから、そこで治療してもらいなさい。」と励まされました。また、電車道を己斐へと向かいました。どこまで行っても、大勢の人が、少し広い場所では、被爆者が座り込み、転がっています。3、4歳位と思える、傷一つないが、子供が死んでいました。ちょうど、黒坊のマネキン人形です。

己斐小学校も爆風の被害を受けていました。講堂も、教室も、運動場でも、被爆者や、尋ね歩く人で、座り込む場所もない有様でした。落ち着いてくると、火傷も気になりましたが、重症の人たちから見れば、恥ずかしい位の火傷なので申し訳ないと思ひまして、あきらめました。

そこで、近所の人たちにも会え、父の元気な様子も知ることができました。3人が校舎のそばでうずくまっていたら、近所の山中高等女学校へ通学しているお姉さんと会い、「何か食べたの？」と声をかけてくださり、「ここを動かさないでよ！」と云い置いて、白米の大きなおむすびと、水筒へお茶を入れて、持ってきてくれた。3人とも朝から何も口にしていなかったもので、涙が

出るほどうれしく、かぶりつきました。

校庭では、沢山の穴を掘り、死体を積み上げては火葬され、全市の空は真っ赤に燃え続け、子供を呼ぶ声、人を探す声、うめき、泣き叫ぶ声、見るもの聞こえるもの、地獄の中でまんじりとせずに朝の来るのを待ちました。その後、新聞で己斐小学校の校庭では2,000体の遺骨がみつきり、発掘され、慰霊モニュメントが建てられたことが報道されていました。

翌7日、上級生の二人と別れ、一人、家の前の広場まで帰って来ると、沢山の近所の人々が避難していて、元気で帰ったことを喜んでくれました。私の父は朝早く、私を東練兵場へ探しに行ったと知らされました。家も朝になって燃え出したそうで玄関や倉庫は崩れ落ちたままでした。周りでは、あちこちの倒れた家の下敷きになっている人たちの助けを求める声が聞こえてきますが、誰もどうしてあげることを出来ません。私はまわりの畠の野菜を水煮したような物を食べさせてもらいました。

8日 父が倒壊した食糧配給所から引き出した食糧を町内の人々に配っておくため、集まって来る人たちに一日中手渡しました。

9日 私は父が作ってくれましたわらじを履いて、25km歩いて湯来まで避難しました。安心したのか、その夜から高熱が出て、「家が燃える、橋が落ちる！」と大声で、うわごとが続き、うなされ続けたそうです。

病院が被爆者の救護に当たるといので入院しました。治療といっても赤チンをぬって上にガーゼを覆ったようなものです。ガーゼをはがす時、大声をあげて泣きさけぶほどの痛さでした。被爆後、2,3日痛いと思わなかった火傷でしたのに、火傷がきれいに乾くまで、胸の前に布団を高く折り、抱きかかえるように座った状態で寝ていました。

病院の近くにある学校に通ってくる妹が、毎朝一升びんにしぼりたての牛乳をいれて持って来てくれました。お蔭で火傷の後もきれいに早く元気になりました。

10月末頃からは女学校が再開されたと知らせがありました。私たち家族は中広配給所の跡地に父がバラックを建てて住めるようになったが、私も11月から学校に通うことができました。2年西組50名も作業中全員亡くなりまし

た。私の小さな時からの志望校であった第一県立女学校に入学した幼友達、多くの学校へ入学した友達もほとんどなくなっておりました。

焼け跡に帰ってみると、市内いたるところに、何枚も焼けた瓦が並べられ、お骨が一握りずつ、入れられて風雨にさらされていました。

4月に希望に胸を膨らませながら、入学しましたが、勉強することもなく、「お国のために」と動員作業に汗を流しながらも、一生懸命頑張ってきた。入学から4か月後のことですから、誰にも考えがおよばないことでした。

1946年から学制が変わり、女学校から新制度の高等学校へと進学し、卒業しました。その後、洋裁学校で3年間学び、お勤めをすることなく、結婚しました。

当時は子育てで忙しく過ごしていましたが、原爆の事を思い出す時、一緒に逃げた二人の上級生が「どうしていらっしゃるか」と気になりました。いろいろと尋ねてみましたが、消息は判りませんでした。もうお名前もお顔も思い出せません。

原爆のあの日は忘れられない悪臭で充満していた。全市のすべてのものを焼き尽くしたあの臭いです。今でもふっとよみがえり、私の周りをただよいます。言いようのない、悲しい、苦しい臭いです。いつの日か忘れることができるでしょうか。

2012年8月6日 広島市平和記念式典で、小学校6年生の孫娘が市民代表として献花させていただきました。子供から孫へと受け継ぎたいと思っております。

子供の手が掛からなくなって、30年余り毎朝少々の雨でも散歩しています。どの道を歩いても、5つ、6つの慰霊碑があり、お参りながら、平和公園に入ります。被爆直後から被爆者に心温かい援助の手を差し伸べてくださいましたスイス人のマルセル・ジュノー博士、米国人のノーマン・カズンズ氏、バーバラ・レイノズさんの慰霊碑にもお参りし、御冥福をお祈りし、世界平和が続きますことを願います。

多くの人々と私の幼友達、学友を一瞬にして奪い、それぞれの人生を変えてしまった戦争は2度と起こってはいけません。20万人を超える多くの命が

犠牲になり、築いてきた平和です。核のない世界が実現して、平和公園の「平和の灯」が一日も早く消えて、世界に平和が来ることを祈っている毎日です。

お聞きになりました皆様が平和の世界が実現しますように、身近なことから、小さな行動でも行っていただきますように願ひまして、私のお話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。